

幕末・明治期の乙訓歌壇

——宇田家所蔵短冊をもとに——

一 はじめに

乙訓地方で栄えたさまざまな文学のうち、和歌に關してよく知られているのは長岡に領地を持っていた細川幽齋と古今伝授についてであるが、近世後期からは乙訓の一般の人々の間でも盛んに和歌が詠まれるようになり、歌壇と呼ぶべきものが形成されていた。

この、いわば乙訓歌壇の形成に最も貢献したのは、向日神社の神官六人部是香（むとべよしか（すずのや））である。是香は平田派の国学者であり、歌学に通じ、和歌にも造詣が深かった。京都に神習舎を開き、文人や貴顕とも交流があった是香は、京都の文雅を乙訓にもたらす重要な役

新 稲 法 子

割を担っていた。

佐佐木信綱は『歌学論叢』⁽¹⁾において、六人部是香に一章を割いて高く評価しているが、これ以降、是香の歌学と和歌に關する目立った研究はなく、是香を中心とする乙訓の人々の和歌についても、ほとんど知られていない。同時期の乙訓の漢詩については『西岡風雅』⁽²⁾という詩集が出版されているが、和歌についてはそれに当たるものも存在しないため、そもそもどのような作品が詠まれていたかを知ることが困難な状況である。乙訓歌壇を和歌史に位置づけるためには、まず残された史料を調査して散逸から守り、研究者に向けて公開していくことが必須であろう。

筆者は長岡京市の宇田家に伝わる史料を調査する機会を得、幕末から大正期に至る短冊五百枚余を閲覧した。これにより、乙訓を代表する名家の一つである宇田家でどのような和歌が詠まれていたかを知ることができた。

本稿はその内容を報告し、併せて宇田家の人々がどのような折にどのような形で和歌を詠んでいたのか、また和歌の指導には誰が当たったのかについて考察し、乙訓歌壇の一端を明らかにするものである。

二 近世後期の乙訓歌壇

六人部は香を中心とする近世後期の乙訓歌壇について、その概略を述べておこう。

『平安人物志』に倣って作られたと考えられる『向日里人物志』³⁾には、向日町を中心とした乙訓の人々が学芸の分野別に記されている。学芸は和歌が最も多く、記載されている述べ百五十一名、実数七十一名のうちの十九名に上る（判読不能一名を除く）。

六人部は香 源清陽（隅田清陽） 岡本宣盛

中小路宗孝 大江真船 高橋春忠 六戸部節香

岡本宣顕 長谷川儀忠 岡崎安忠 服部清忠

源水穂（咲良廼居） 上田俊熙（藤原） 釈融海

源家清 宇田耕（藤原利起） 岡田義方

岡田義達（義道） 杉森政忠

これらの人々は和歌の他に書や茶道などさまざまな部にも記載されている。いま文芸に関係するものについてだけいえば、六人部は香から高橋春忠までの六名は和学、六人部は香と大江真船の二名は和音訓、源清陽・岡本宣盛・大江真船・岡本宣顕・源家清・宇田耕は連歌、源清陽と源家清は発句師、源清陽・岡本宣盛・岡本宣顕は俳諧の部にも名が挙がっている。

乙訓歌壇というものを考えるとき、『向日町人物志』和歌の部に名前の挙がっているこれらの人々が、その主な構成員ということができよう。以下、一部ではあるが簡単に紹介したい。

まず、**六人部是香**（一七九八―一八六三）は先述し

た向日神社の神官である。是香は幼くして父忠篤を亡くし、伯父に当たる向日神社神官六人部節香（同じく『向日里人物志』に記載されている）の養子となった。文政六年、江戸に出て平田篤胤に学び、関西における平田派の重鎮と目された。『顕幽順考論』等の著作があり、孝明天皇にも進講した。子の是房に家職を譲ってからは、京都の三本木に神習舎を開いている。

是香の学問は歌学にも及び、その著書に『長歌玉琴』『古今集撰緝考』『古今集仮字序真字序論』などの歌学書、長歌集『篤廼木綿垂』がある。

山中芳和によると、是香が嘉永六年に著した『日向国神蹟考』に「そもそも予が学文をしさまは、はしめのほと藤垣内大人（割注・本居大平）随ひて、常に都の奴傳舎に集ふ輩と親しく交りしが」とあつて、是香が篤胤入門以前に本居大平門人であつたこと、城戸千楯を中心とする奴傳舎社中と親交があつたことが確認されている^④。後述する岡本宣顕や宇田耕も大平の門人であつたことから、乙訓における大平の影響が注目さ

れる。

佐佐木信綱（一八七二―一九六三）は『歌学論叢』において「歌学者としての六人部是香」と題して六人部是香に一章を割いている。佐々木は『篤廼木綿垂』について「その長歌の書き様の一見識あるに注意してゐた」、『長歌玉琴』について「その卓見に富んで、類著中異彩を放つてゐるものあるを知り得た」と是香を高く評価しており、「その後種々彼に就いて調べ、又先頃京阪の秋を探つた序に、是香の裔なる向神社社司六人部是暉氏を向日町に訪ひ、その門人なりし安部野神社社司渡邊敏雄氏に大阪に会つて、是香の遺稿を視、その逸事を聞くを得た。」と是香の書物を見るために向日町を訪れたことを記している^⑤。是香の歌学と和歌が高く評価されていたことが窺えよう。

是香は向日町にも家塾を開き、京都の自宅で歌会を開くだけでなく、向日町で開かれる歌会にも出席した^⑥。乙訓の人々は、是香を通じて京都の一流の文化をリアルタイムで知ることができたのである。

岡本宣顕と**岡本宣盛**は兄弟で、共に文政十三年から

嘉永五年まで、『平安人物志』文雅の部に掲載されている。以下に「『平安人物志』掲載諸家関連短冊における解説」をそれぞれ引用する。

岡本宣顕（天明五年～文久二年）文雅家。宣顕字は士慎、幼名国二郎後九十郎、弥兵衛と称した。号は南岡、後に晴（或は静）軒、京都の人、岡本晦亭（宣休）の嫡子天明五年十月十五日生、洛西神足村に住し油屋を業とするかたわら文雅を嗜み、本居大平の門に入り歌を学んだ。文久二年八月六日没、年七十八。法名晴軒戒誓浄傳禪定門。⁷⁾

岡本宣盛（～文久二年）文雅家。諱は宣盛、小名松之介、北阜と号し三郎兵衛と称した。岡本宣顕の弟、同族岡本高興の嗣となり神足村の大庄屋をつとめた。文久二年八月十一日没、年六十八法名、洗心斎放誓浄光禪定門。⁸⁾

中小路宗孝は『向日里人物志』に「向日里南西長岡

神主」とあり、長岡天満宮の神官である。

岡崎安忠は俗称岡崎佐吉、号は梅亭、居住地が寺戸村で岡田義方門人とあるが、『向日里人物志』に掲載されている人々より若い世代の岡崎秀雄（一八一六～一八六二）と同じ一族かもしれない。

東山の麓に住み、富士谷成章を祖と仰ぐ近世和歌の一派、北辺門の歌人で太田垣蓮月らとの交遊もあった秀雄は、向日町寺戸村の庄屋出身で、鳥羽屋九郎兵衛の門人として記録が残っている。⁹⁾ 京都の人と見なされがちな秀雄を育んだのが、乙訓の文化サロンであったことは、もっと注目されてもいいだろう。

源水穂は鳥羽屋九郎兵衛（桜居）、^{さくらゐのや}是香の重要な門人の一人である。絞油業を営んでいた鳥羽屋は、乙訓の人々が集う場所として文化サロンの役割を果たしていたが、文政二年（一八一九）に家督相続した九代目九郎兵衛は特に学問に熱心であり、桜居と号して六人部是香に国学と和歌を学び、上代様の筆法家として知られ、奉公人にも学問文芸を奨励していた。

宇田耕（～一八五〇）は貞造または貞蔵、利起とい

い、儒医で勤皇家として知られる宇田栗園（一八二六—一九〇一）の父である。宇田家と和歌については次節で述べる。

三 宇田家と和歌

勤皇家として知られ、歌人としては歌集『栗廼花』がある宇田栗園（一八二六—一九〇一）は、乙訓の宇田家が輩出した人物である。

神足村出身の栗園は『文久二十六家絶句』にその作品が収められているように、もともと和歌ではなく漢詩で名を知られていた。京都にやって来た梁川星巖に就き、星巖が安政の大獄直前に亡くなると、地元乙訓で漢詩を広めるのに貢献した。

明治十五年、乙訓の詩人たちが出版した漢詩集『西岡風雅』に、栗園は七言絶句四首からなる題辭を寄せている。詩の中で栗園は「恍然一夢十余春」と詩社を主宰していたころを懐かしんでおり、既に漢詩ではなく和歌を詠むようになっていたと推測される。栗園が

和歌に転じたのは、勤皇家として、また京都留守居としてふさわしい文芸だったからであろう。

既に明治十年、明治天皇は京都に残した旧貴族が家職に励むよう、歌会を持つことを岩倉具視に提案していた。現在も続いている向陽会である。栗園は岩倉具視の推薦によって向陽会の初代幹事となった¹⁰⁾。

維新後も優れた官僚として多くの仕事を成し遂げてきた栗園は、向陽会の幹事も二十余年間にわたって勤め上げたのであるが、いかに事務能力に優れていたとしても、和歌を家職とする旧貴族の歌会の幹事をするというのは、並大抵のことではないと思われる。それができたのは、父利起こと宇田耕が『向日里人物志』の和歌に名前を挙げられているように和歌を詠む人であったこと、引いては和歌が盛んであった乙訓の文化的環境が役立ったのではないだろうか。

黒田謙『名家歴訪録』で栗園は次の様に語っている。

亡父は医学を海上随甌——之は京都で初めて蘭法を用ひた人で——に、読書は伊藤東所に学び、国

学は本居大平につき、それで田舎で医業をしなが

ら、旁ら漢籍国書を楽しんでゐました。また私は
医術を豊後から出た宗真哉に受け、読書は巖垣松
苗の門人で、十九歳頃から同じ西岡在で、向日町
の東に当たる土川村といふに寓居して、こゝで藪
医者をやつて居ましたので。元來亡父は大平の門
人で歌を詠みましたから、汝もやれとのことで
十一二の時作つて見ましたが、兄共は皆詩をやつ
て、自分も其方が面白くなり、夫からは詩ばかり
作つて居ると、丁度星巖翁が晩年に京都へ参られ
ましたので、夫から其門に入て益々詩を作りまし
た。⁽¹¹⁾

この発言から、宇田耕が篤胤入門以前の六十部是香や
岡本宣頭と同じく、本居大平の門人であったことがわ
かる。神足宇田家に大平の短冊や「本居大平子日歌切」
が伝わっていることも、このことを裏付ける。

また宇田家には、先述の六人部是香を輩出した向日
神社とは、単に同じ乙訓に住まいするという以上の深

い結びつきがあつた。

日浅忠行氏によると、宇田家の先祖、岸坊法印安清、
快晴親子は実相院門跡に坊官として仕えていた。元禄
四年に門跡義延が罷免されたのに連座して岸坊家はつ
ぶされ、快晴は追放となり、禁裏御所修理職にあつた
弟の快直も職を追われ、西岡鶏冠井村に居を移すこと
になつた。快直は四十年にわたつて帰参を嘆願するが
かなわず、その子快晃は男子を全員京都の古義堂に通
わせ、儒学・儒医としての宇田家の基礎を作つた。⁽¹²⁾

宇田家が実相院門跡家臣に復帰したのは百年以上後
の宇田耕の代である。文化四年、祖父快直の無念を話
した耕に、六人部節香が助力を申し出て実現した。節
香の申し出を聞いたとき、耕は喜びの余り手足の震え
が止まらなかつたといふ。⁽¹³⁾

六人部節香と宇田耕は共に『向日町人物志』の和歌
の部に名が上がつている。耕が和歌を嗜んだのは、節
香との関係も影響したのではないか。両家の結びつき
を考えれば、六人部是香もしばしば出席したという向
日町での歌会に、宇田家の人々が無関心であつたとは



図 1

考え難い。是香亡き後も、宇田家は神道で御霊祭りを
行っていたことがわかる短冊が残されており、宇田家
と六人部家との特別な結びつきが長く続いていたこと
を窺わせる。

元来儒学の家である宇田家から、漢詩ではなく和歌
を嗜んでいた耕や、漢詩人として名を知られていたが
和歌に転じて向陽会の初代幹事も務めた栗園という人
物が出たのは、乙訓における国学・和歌の重要な拠点
であった向日神社との強い結びつきがその背景として
考えられるのである。

四 宇田家所蔵短冊について

宇田栗園には歌集『栗廼花』があり、高崎正風らと

共に御歌所派の歌人として位置づけられよう。しかし、
栗園以外の宇田家の人々や、乙訓歌壇の和歌はこれま
でほとんど知られていなかった。

今回報告する宇田家所蔵短冊は、白紙四枚を含め
五一一枚、宇田家を中心として乙訓歌壇を知ることの
できる貴重な資料である。その全体は次に掲げる表を
参照されたいが、和歌の他に、絵画二十一枚、漢詩一
枚を含む。また、短冊以外に懐紙一枚がある。なお、
この表は向日市文化資料館によるものに筆者が若干の
修正を加えたものであり、数字は通し番号である。
以下、注目に値するものをいくつか紹介し、宇田家
所蔵短冊の概容を示したい。

四一一 作者とその歌

古稀を祝う歌

1 古稀の年をむかひて

むかしより稀(和)なる年をすこしきて思(和)ひをとけ



図2



図3

- ぬ身こそはつかし (可) 弘 (因)
- 2 古稀の年をむかひて
 むかしより稀なる年をすこしきて思ひをとけ (利)
 ぬ身こそはつかし (加) 弘 (同上)
- 3 古稀の年をむかひて
 むかしよりまれなる年をすこしきて思ひをと (同)

「裏」 七十路の老のよはひを妻や子か祝ふこの日そ
 うれしかりける (同)

けぬ身こそはつかし (可) 弘 (同上)

1～24の24員は署名から宇田弘 (ひろむ) (?～一九二四)であることが明らかである。1から3は同一の歌であるが、仮名の字母が異なる部分を()で示した。詞書から、これらは古稀の祝いに配布するため用意したものの残部で、3はその宴の席で思いついた歌を裏に書き付けたものと推測される。1・2については中央部で二つ折りされた跡があり、郵送するつもりだったと考えられる。

宇田弘の代表歌

5 色々の花もひとつに咲みちてけしきのとけき

野辺の夕くれ (図4) 弘

〔裏〕 府下乙訓郡新神足村字神足 宇田弘 (図5)

15 色々の花もひとつに咲みちてけしきのとけき

野辺の夕くれ 弘

〔裏〕 府下

20 遠近の花にひかれて春の日のくる、もしらて

あそひぬるかな (図6) 弘

〔裏〕 大津町字西今嵐四十三番屋敷 摩島房彦 (図7)

21 終日見花

遠近の花にひかれて春の日のくる、もしらて

あそひぬるかな 弘

〔裏〕 京都府乙訓郡神足村 宇田弘



図5



図4

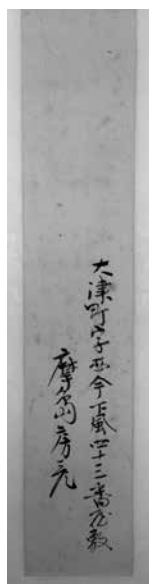


図7

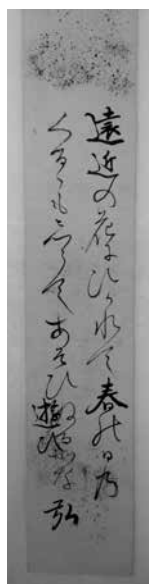


図6

「色々の」「遠近の」の二首は複数員あり、弘が自身の代表歌だと思っていたふしがある。裏面に住所があるのは歌会に提出したり人に贈ったりしたものの残部であろう。20の裏面には摩島房彦の名があるが、21の歌と同一なので、あるいは摩島房彦が弘に揮毫を依頼したのかもしれない。この大津の摩島房彦という人物は不明だが、京都の儒者摩島松南の縁者か。

追悼歌

30 去年の秋ともになかめし面影をそてにあつめ

てしほる夕露 是愛^(図8)

38 白露ときえにし友をしのふれはこゝろしをる、

秋のゆふくれ 察聞^(図9)

128 みちしあらはたつねをゆかむ君かありかにめ

くりこしけふの夕のつゆにぬるとも 宣忠^(図10)

337 おもひきや手元はなさぬ幼子に遠き旅路を独

さすとは 稚苗^(図11)



図8



図9



図10



図11

30の是愛は六人部是愛、38の察聞は長岡京市東神足にある大悲山観音寺の僧侶である。128は旋頭歌で、宣忠は岡本宣忠。これらはその内容から、弔問の歌であるが、同じ短冊に記されているため同時期の作だと推測される。

これら追悼歌の返歌は見つけられなかったが、337は宇田家の人物による追悼歌である。稚苗は宇田善繼(後述)、歌意からまだ幼い子供を亡くしたものと思われる。これらの短冊から、乙訓の人々が、祝い事や悲しみがあるたびに和歌を贈っていたことがわかる。

岡本宣忠との交流

91 寄萩懐旧

あなかなしふる枝の真萩さきぬれとむかしの

あきはかへらさりけり (岡12) 宣忠

92 秩父嶺のみゆきもきえて荒川のなみものとき

くにほふ花かな (岡14) 宣忠

〔裏〕平安城西長岡里人岡本弥平 (岡15)



図12

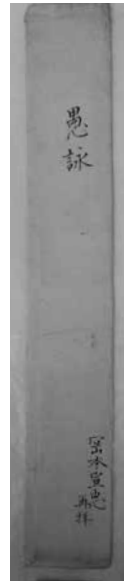


図13



図14



図15

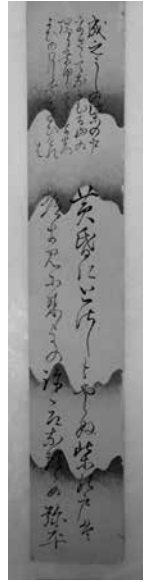


図16

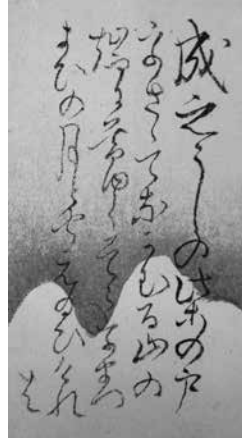


図17

180 成之うしの柴の戸をさしてなかもむる山の端に
 暮ゆくそらをまつよひの月と聞えぬひければ
 黄昏にとさしもやらぬ柴の戸はつき見に来よ
 のこゝろなるらめ 弥平^(図16・17)

宇田家のもの以外で最も多いのは岡本家の短冊で、
 両家の交流が窺える。中でも多いのは宣忠（弥平）で

九十員に上る。岡本宣忠は長岡宮城遺址創設会の一人、
 「長岡宮城私考」を記し、明治二十八年（一八九五）
 の平安京遷都千百年記念事業にあたって長岡宮城大極
 殿遺址の石碑建立に尽力した人物である。⁽¹⁾

91は「愚詠 岡本宣忠再拜」と記した包み紙が残つ
 ており、^(図13) 92・176は裏面に住所氏名が記されている。^(図15) 180
 は成之（宇田善継）の歌に対する返歌であり、弥平と
 善継の和歌を通じた交流が窺える。

四―二 和歌の指導者

稚苗Ⅱ若苗Ⅱ宇田善継

宇田家所蔵短冊で最も多いのは、稚苗の九十員であ
 り、若苗も比較的多く三十五員ある。両者は字体が酷
 似しており、409のように若苗の短冊の裏に稚苗の和歌
 が書き付けられていることから、同一人物だと推測さ
 れる。

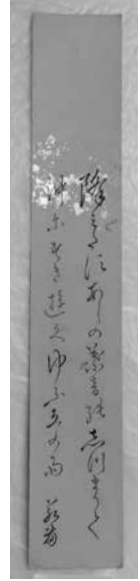


図18



図19

とほほ同じ歌が、若苗の短冊(305)の裏に存在する。

〔裏〕暮秋鹿

木の葉ちる峰に妻こふ小男鹿の立とあらはる秋そ
くれゆく 若苗^(図20)

409 降みたすあしの葉音のしつまりて沖にすきゆ

くゆふ立の雨 若苗^(図18)

〔裏〕春祝 くもりなく治まる御代のためしとや四

方の霞のいろのゆたけさ 稚苗^(図19)

また、成之の次の歌、

270 暮秋鹿

木の葉ちる峰に妻こふさをしかの立とあらは

に秋そ暮ゆく 成之^(図20)



図20



図22



図21

このことから、成之は若苗だということが明らかである。

また、神足宇田家の別の短冊に稚苗のものがあり、裏面に「善繼」と記したものが複数存在することから、

(図21) (図22)

稚苗・若苗・成之は同一人物で宇田善繼（一八六二）ということがわかる。

善繼は元吉、振々斎、宇田耕の長男で栗園の兄に当たる。儒医であるが、神足村実相院の領民紛争を調停するなど、地元の指導者的な存在であった。文雅の面では大部な詩稿を残している。栗園は兄の影響で漢詩を詠むようになったと語っているが、善繼は和歌も詠み、このように大量の短冊を残していたのである。

稚苗・若苗と松苗

稚苗・若苗はどちらも若い苗という意味の号であるが、ここで思い出されるのは岩垣東園、別号松苗である。岩垣東園（一七七四〜一八四九）は京都の人、西尾杏庵の子で、岩垣竜溪に学んで養子となった。古学

を唱え、また国史に通じた。『平安人物志』文化十年版では儒家、文政五年版では儒家と詩の部に名前が記載されている。

先に引用した『名家歴訪録』で栗園は「読書は巖垣松苗の門人⁽¹⁵⁾で」と語っており、それを裏付けるように神足宇田家には「岩垣松苗七絶」が伝わる。宇田耕は本居大平の門人だったが、大平は天保四年（一八三三）に没しているから、栗園だけでなく善継も岩垣松苗から和歌の手ほどきを受けたのではないだろうか。松苗の門人として名乗ったと推測すれば、稚苗・若苗すなわち幼い苗という意味の号が説明できるのである。

四一三 歌が詠まれた場

先述したように、乙訓の人々は祝い事や弔問といった人生の節目で和歌のやりとりをしていたが、その他にはどのような形で和歌を詠んでいたのであろうか。

今回調査したのとは別の神足宇田家の短冊には安政五年（一八五八）に行われた歌会のものがある^{(図23)(図24)}。今回



図23

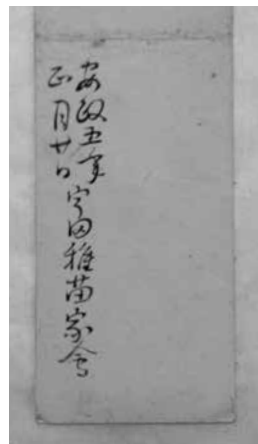


図24

調査したもののの中にも歌会に用いられたと考えられるものがある。

例えば、石陰という署名のある短冊の一員は、

421 露底虫

野辺みれは置つゆ白し鳴虫のかしらの霜とさ
えやしぬらん 石陰^(図25)



図25

と題詠が記されているが、裏面には朱筆で

匿名第四 弘君

(図26)(図27)

とあって、匿名で票を入れる歌会のために一時的な号を用いたと考えられる。

短冊の中には折り目が残っているものもある。二つ折り、四つ折りもあるが三つ折りが最も多く計三十三員ある。これらは歌会のために郵送されたと推測するが、郵送ではなく席上で探題が行われた可能性もある。探題については山本啓介氏が次のように説明されているが、短冊を折って行なうものである。

ここでは、宗匠がその場で短冊に題を書き、それ



図26

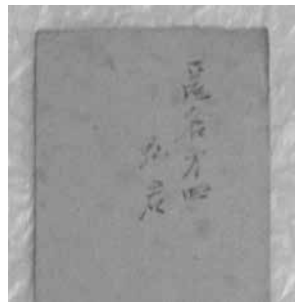


図27

を三つに折り、硯の蓋に入れて、上位の者から順にその短冊を探らせるとしている。(略) 少なくとも南北朝期以降には、このように短冊上部に歌題を記し、それを折りたたくで硯蓋に入れたものを各々が引き当てる探題を行っていたことが知られる。⁽¹⁶⁾

今回まだその意味とそれぞれの短冊の関係を明らかにすることができなかつたが、裏面に数字が書き込まれている短冊も多く、歌会を運営する上での何らかの記号だったと推測される。これらについては元の数字の並びを再現できれば、歌会の参加者や歌の評価などを明らかにすることに繋がるかもしれない。

五 まとめ

以上、甚だ蕪雑ではあるが今回調査した宇田家所蔵短冊について報告した。短冊からは宇田家の人々が和歌を通じて乙訓の近隣の人々と交流していたことが伺えた。最も多くの短冊を残した善継の指導に当たった人物については、岩垣松苗であったと考える。また短冊の痕跡から、宇田家の人々が歌会の形で和歌を楽しんでいたと推測した。

乙訓歌壇の研究に当たってはその史料の確保が急務であり、今後も調査が必要である。今回の調査に当たっ

ては全ての短冊を翻字したが、機会を見て公開したいと思っている。

注

- (1) 佐佐木信綱「歌学者としての六人部是香」『歌学論叢』博文館、一九〇八年。
- (2) 向日市文化資料館蔵、明治一五年（一八八二）。
- (3) 多田吉宏家所蔵、文政八年（一八二五）、写本。
- (4) 山中芳和「六十部是香の国文学における篤胤学の受容」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第15号、二〇一二年。
- (5) 1に同じ。
- (6) 向日市文化資料館平成二十五年度企画展「向日里人物志」の世界——近世乙訓の文化サロン——」図録、二〇一三年による。
- (7) 国際日本文化研究センター http://db.nichibun.ac.jp/pcl/ja/category/heian_tanzakuhimi 「平安人物志」掲載諸家関連短冊」による。
- (8) 7に同じ。
- (9) 6に同じ。
- (10) 新稲法子「宇田栗園と漢詩」『和漢比較文学』57号、二〇一六年。
- (11) 黒田譲「宇田栗園翁」『名家歴訪録』中巻、一九〇一年。
- (12) 日浅忠行「実相院門跡坊官宇田家とその一族」『乙訓文化遺産』、二〇一六年。

- (13) 日浅忠行「宇田家文書『宇田家血統略説』をもとにした実相院門跡坊官『宇田家由緒』の考察」、二〇一七年十月宇田淵研究会での発表レジュメによる。
- (14) 玉城玲子「長岡宮大極殿跡の探求と岡本爺平」『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち―』ミネルヴァ書房、二〇一四年。
- (15) 11に同じ。
- (16) 山本啓介『詠歌としての和歌和歌会作法・字余り歌―付（翻刻）和歌会作法書―』新典社二〇〇九年

貴重な資料を閲覧させていただいた宇田家の方々に深く感謝申し上げます。また調査にあたっては向日市文化資料館に御協力いただき、宇田淵研究会の皆さんからは貴重な御意見やアドバイスをいただきました。記して感謝申し上げます。

宇田家所蔵短冊一覽 *資料館作成のものに加筆修正した。宇田家の人物の没年は日浅氏情報による。

整理番号	詠者	姓名	員	番号	人物情報	生没
11 10 9 8	宣紹 宣行 直躬 弥平	岡本宣紹 岡本宣行 岡本直躬 岡本弥平	19 2 1 4	184 } 182 } 181 } 177 } 202 } 183 } 180 }	5裏面に「府下乙訓郡新神足村字神足 宇田弘」 20裏に「天津町字西今嵐四十三番屋敷 摩島房彦」 21裏面に「京都府乙訓郡神足村 宇田弘」 向日神社の社家、是香の孫	大正十三年（一九二四）84歳没 明治三十四年（一九〇二）没 明治三十四年（一九〇二）75歳没 弘化四年（一八四七）生 文久三年（一八六三）58歳没
7 6 5	宣忠 宣顕 察聞	岡本宣忠 岡本宣顕	86 2	91 } 89 } 34 } 88 }		
4 3 2 18	是盛 是香 是愛 よし暉 淵 密	六人部是盛力 六人部是香 六人部是愛 六人部是暉 宇田淵 宇田退蔵	1 1 4 1 1 1	33 32 28 } 31 }		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	13	12	17	16	15	14	整理番号
若苗	秀一	守一	正明	忠康	成之	白邦	靈淳	徳空	弥比郎	高紹	周延	蓮月	智恵子	正雄	宗光	宗孝	宗芳	詠者
宇田善継										岡本三郎兵衛		大田垣蓮月	閑院宮智恵子	岡崎正雄力	中小路宗光	中小路宗孝	中小路宗芳	姓名
35	3	3	2	2	14	1	5	2	4	19	1	2	1	16	9	1	5	員
293 ┆ 327	290 ┆ 292	287 ┆ 289	285 ・ 286	283 ・ 284	269 ┆ 282	268	263 ┆ 267	261 ・ 262	257 ┆ 260	238 ┆ 256	237	235 ・ 236	234	218 ┆ 233	209 ┆ 217	208	203 ┆ 207	番号
										246裏面に「神足 岡本三郎兵衛」								人物情報
												寛政三年 ┆ 明治八年	明治五年 ┆ 昭和二十二					生没
												明治八年(一八七五)	明治五年(一八七二)					

				43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	整理番号	
					<input type="checkbox"/>	松月 <input type="checkbox"/>	嘉樹	直孝	幸雄	貞幹	耕人	白禱	秀実カ	石陰	<input type="checkbox"/> 誠	稚苗	詠者	
														宇田弘	宇田善継	姓名		
計 512	1	1	22	4	17	1	4	6	2	1	18	9	3	2	2	1	92	員
	512	511	490 }	486 }	469 }	468	464 }	458 }	456 ・	455	437 }	428 }	425 }	423 ・	421 ・	420 ・	328 }	番号
	藤原徳光	西樵	六人部暉峰（是暉の二女）あり		名前の記載なし、稚苗・成之・弘・若苗の作あり									421裏に朱で「匿名第四 弘君」とあり	金へんに覧か	り	宇田家所蔵「宇田淵等短冊一括」の稚苗の短冊の裏に「善継」とあり	人物情報
			明治十年（一八七七）生															生没